

太陽と海と緑の大地が織りなす多様性と持続性 森と海の循環で目指すSDGsのまちづくり!!

森と海が織りなす 串間市流SDGsのまちづくり

宮崎空港から公共交通を利用し、宮崎県串間市に入るには、まずJR九州・宮崎空港線と日南線を乗り継ぎ、油津あぶらつ(日南市)経由で串間駅に到達する方法が一般的だ。または、宮崎空港から路線バスで油津に行き、JR九州・日南線の油津駅から串間駅に向かうルートもある。

しかし、取材時(令和3/2021年10月28日)の日南線は、9月16日に宮崎県に上陸した台風14号の大雨の影響により、宮崎市内で発生した土砂崩れで寸断されたまま、運行休止が続いていた(令和3年12月11日に完全復旧した)。

そこで取材に際しては、宮崎空港から日南市・油津待合所までの路線バスを利用。9月27日から運行開始されているJR九州油津駅

へ串間駅を結ぶJRの代替運行バス(代替バス運行全区间は宮崎県・青島駅へ鹿児島県・志布志駅)に乗り継ぎ、串間市に入った。

その間の所要時間は、JRを普通に使用した場合とほとんど変わらない2時間20分前後で済んだ。また、日南市から串間市にかけての日南海岸沿いの道(主に国道220号)を走ることになったため、日南海岸の雄大かつ変化に満ちた絶景を、日南線の車窓から見る風景より、さらに海に近い位置から堪能することができた。

日南海岸は大分県南部から宮崎県全域、さらに鹿児島県境までに至る全長約400kmもの長大な日向灘沿いの海岸線のうち、主に南側のエリア(全長約120km)を指す。日南海岸は全域が日南海岸国定公園に指定されており、日向灘の北部側に位置する日豊海岸(全長約120km)も、日豊海岸国定公園に指定されている。

日向灘に面する自治体は延岡市、日向市、

しまだとしみつ
島田俊光
串間市長

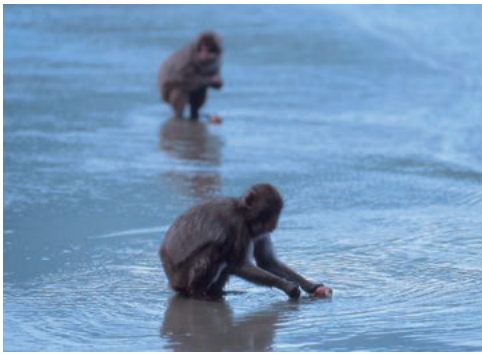


宮崎市、日南市、串間市をはじめとする計10市町。とりわけ、宮崎県および日南海岸の最南端にして九州南東端に位置する串間市は、地域の南側一帯が鹿児島県との県境(志布志市)となる志布志湾に面しており、南国の風情がひとときわ色濃く漂うまちとして、よく知られている。

「日南海岸はリアス式の崖海岸が多く、崖



崖海岸と岩礁が主体となった美しくもワイルドな魅力の日南海岸



世界中の動物学者を驚かせた幸島の文化猿たち



串間市の豊かな自然のシンボル・都井岬の岬馬(御崎馬)

や岩礁の間にポケットビーチ(小規模な砂浜)が点在しています。串間市も同様で、海岸線が非常に長い割に、海水浴場は高松海水浴場一カ所しかありません。しかし、高松海水浴場は環境省が監修する海水浴場水質調査で長年にわたり、最高ランクの水質AAを維持しています。その事実が象徴するように、国指定天然記念物《岬馬の繁殖地・都井岬》(※都

井岬は旧高鍋藩時代の放牧地で、岬馬/御崎馬は高鍋藩が飼育した日本在来種が半野生化。現在も繁殖を続けている)および《文化猿の繁殖地・幸島》(※幸島は周囲約3.5kmの離島。ここに生息するニホンザルの群は人間のように海水で餌の芋を洗う行動を見せるため、文化猿の呼称が生まれた)なども含む、串間市の海岸線の美しさは比類ないもので、

本市の大きな自慢です。

また、単に美しいだけではありません。アカウミガメをはじめとする多様な野生生物の繁殖地が日南海岸全域の随所であり、植生が豊かで、都井岬はソテツの北限自生地としても知られています。

しかし、串間市を含む日南海岸全体が、こうした美しく豊かな海岸線を維持してこられた最大要因の一つが、実は宮崎県の内陸部に広がる健全な森林にあることは、意外に知られていません」

そう語る島田俊光串間市長は、10代の頃から林業一筋の人生を歩んできました。串間市森林組合組合長、南那珂森林組合組合長、

長、宮崎県森林組合連合会代表理事会長などを歴任後、宮崎県議会議員(1期)などを経て、平成29(2017)年10月8日に串間市長に就任。令和3年10月8日から、在職2期・5年目を迎えている(※南那珂森林組合の南那珂は、現在の日南市・串間市のエリアを指す旧行政区域・南那珂郡に由来する地域名)。

自然エネルギー供給のまちを目指す 串間市の新たなシンボル

「有名な『森は海の恋人』という言葉をつくったのは、養殖漁業者として知られ、京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授でもある畠山重篤さんですが、それはまさに林業の世界に長年生きてきた私の持論とも一致する言葉です。





「森と海の循環」のつなぎ役としても機能する串間市の代表的な河川・福島川

私は長年にわたる環境保全を、一種のライフワークとして取り組んできました。たまたまご縁があって、平成29年から串間市長へと立場を変えた現在は、その考え方を市政に反映することにより、さらに幅の広い取り組みへと、進化させることができつつある実感を感じております。

は、私が長年の持論としてきた、まさに森と海を車の両輪とする仕組みづくりを核としています(島田市長)

島田市長は2期目の市政を開始するに当たり、『広報くしま』(令和3年11月号)に寄せた市長就任のあいさつの中で、令和3年度から計画期間とする「第六次串間市長期総合計画」および「第2期串間市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン」に基づくまちづくりを踏まえながら、自らの2期目の市政で特に重点的に取り組む三つの政策として、「防災拠点施設の整備」「脱炭素社会の実現推進」「100歳健康社会の実現」を挙げている。

さらに「串間市は自然エネルギー供給のまちを目指す」と、あいさつの中で明言することにより、重点施策の中心軸が「脱炭素社会の実現と推進」にあることも改めて示した。

脱炭素社会の構築を目指す串間市における、直近の端的な動きの事例を挙げると、令和2(2020)年12月11日、2050年までにCO₂排出量を実質ゼロにすることを指す《串間市ゼロカーボンシティ宣言》を、宮崎県内の自治体で初めて表明している。

「串間市はそれまでもSDGsの理念を掲げ、雄大な自然を背景とする風力発電、豊かな森林(主に杉などの植林地)から出る間伐材などを活用した木質バイオマス発電、太陽光発電、小水力発電、地下水熱利用など、各種の再生可能エネルギー施設等を順次整備して、循環型社会への歩みをいち早く実践して



日南海岸の植生の豊かさを象徴するソテツの北限自生地(都井岬)

その大きな契機は、私が市長に就任する2年前の平成27(2015)年に、国連が『持続可能な開発のための2030アジェンダ/SDGs』を採択し、17項目にわたる国際社会共通の目標(ゴール)を定めたことにあります。

国連の方針を受けて、現在、全国の自治体は各自の地域性に応じた、環境への配慮を軸とする持続可能なまちづくりに取り組んでおられます。その手法は千差万別ですが、串間市が進めようとしているSDGsのまちづくり



杉の間伐材など木質バイオマスをフル活用するバイオマス発電所

まいりました。その動きをより強固なものとするため、将来的に市民の安全・安心な暮らしを守り、災害にも強く、同時に自然との共生が無理なくできるまちを目指すべく、市民・事業者と一体になって循環型社会を目指す《ゼロカーボンシティ宣言》を行ったのです(島田市長)

さらに、それに先駆ける令和2年10月1日には、九州最大の風力発電所《串間ウインドヒル》(運営は九電グループが全額出資する串間ウインドヒル株式会社)が、営業運転を開始している。

「串間風力発電所は都井岬からもよく見え

串間市

(宮崎県)

市 政 ル ポ



九州最大の風力発電所・串間ウインドヒルは脱炭素社会構築の推進源



目の前に志布志湾の穏やかな海が広がり、ロケーション抜群の高松キャンプ公園

る、本城地区と都井地区の稜線上に23基もの巨大な風車が並び、非常に大規模な風力発電所です。運転が軌道に乗れば、年間1億3700万kW/hの発電量が得られると発表されており、これは一般家庭4万6000世帯分の年間電力消費量に相当するそうです。令和3年10月1日時点の串間市の人口は1万6486人、世帯数は7154世帯ですから、串間ウインドヒルの創出する風力発電の力がいかに大きなものであるか、改めて分かります(島田市長)

串間ウインドヒルの23基もの巨大風車が、丘上の尾根にずらりと並び雄大な風景は、岬馬の撮影のため案内していただいた都井岬の丘上から、実によく見渡せた。

崖や岩礁にぶつかる日向灘の白波を眼下に從えたかのような九州最大の風力発電所の雄姿は、串間市が本格的に踏み出した脱炭素社会構築への歩み、SDGsのまちづくりに向ける姿勢をシンボリックに示すものといえる。また今後、新型コロナウイルスの感染拡大が本格的に落ち着いた際には、串間市が積極的に展開するエコツーリズムの新名所としても、国内外から訪れるツーリストたちの人気と支持を得ていくことだろう(※串間市は平成29年2月、九州では初となる国の《エコツーリズム推進地域》の認定を受けている)。

地域活性化の多彩なけん引役が期待される《道の駅くしま》

これまで紹介してきたように、森と海の循環を軸とする脱炭素社会の構築、SDGsのまちづくりを、令和3年10月の市長就任2期目の開始以後、加速しつつある島田市長だが、「1期目の4年間においては、そこに至る前段として、串間市にとって長年の懸案となっていた事業を幾つか集中的に完遂させ、道筋を構築」してきた。

その代表的な事例としては《道の駅くしま》の供用開始、岬馬の聖地・都井岬の再開発事業(観光拠点施設「都井岬観光交流館パカラパカ」の整備)、《串間温泉いこいの里》(串間市の食の魅力も楽しめる温泉施設)のリニューアル事業などが挙げられる。



都井岬に建設された観光拠点施設「パカラパカ」(「パカラパカ」は地元高校生が命名)

中でも令和3年4月24日にプレオープンした《道の駅くしま》(計画されている施設のうち飲食・物販施設と情報館のみの先行開業)は、日南線・串間駅前という、道の駅としては異例の立地条件だが、中心市街地活性化の起爆剤でもある。

また、前出の島田市長による2期目就任のあいさつにもあった「防災拠点施設の整備」の一環であり、市民および観光客を含めた幅広い交流施設としての意味もある。さらに、建物を建設するに当たっては、二酸化炭素排出抑制を図るために、国の事業「二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(再生可能エネルギー)



「道の駅くしま」の背後地で建設が進む「市民交流施設」

ギー電気・熱自立的普及促進事業」を活用して、地下水熱を利用した空調設備を導入するなど、脱炭素のまちづくりの一環としての意味も小さくない。

「《道の駅くしま》は、令和元（2019）年度から建設を進めてきた、串間市にとって待望の



串間市の交流拠点、防災拠点など多彩なミッションを兼ねた「道の駅くしま」

交流拠点施設です。先行開業した飲食・物販施設はすでに大きな集客力を発揮しています。観光案内所を設置した情報館も、交通情報・観光情報を随時伝える大型モニターのほか、高品位のトイレや授乳室などの設備も充実しており、観光客からご好評をいただいております。

現在工事を進めている残りの施設は、多世代間の交流ができる『市民交流施設』と、屋根付きで天候に左右されずにイベントなどを開催できる『イベント広場』です。こちらも令和3年度内には完成し、令和4（2022）年度の当初から開業予定です。

緊急事態宣言が全国で解除された現在、これからは新しい生活様式を踏まえた観光交流の新たな時代の幕開けが予測されます。その際にはさらに、『道の駅くしま』の真価がより発揮されていくものと、大いに期待しております」（島田市長）

《道の駅くしま》の周辺には、例えば築100年以上の歴史を誇り、南那珂地域の銘木をふんだんに使って建てられた国指定重要文化財《旧吉松家住宅》（※吉松家は代々庄屋を務めるなどした地元の名家で、串間市誕生以前の旧福島町時代から村長や県議、代議士などの名士を多数輩出）が、徒歩5分の至近距離にある。

さらに《道の駅くしま》を拠点に、串間市では「道の駅く都井岬く串間温泉いこいの里く高松キャンプ公園（令和3年4月にオープン



しっとりとした感触が人気の美人の湯「串間温泉いこいの里」

したキャンプ場」といった、串間市の代表的な観光ルートを巡る、エコツアーの要素もふんだんに取り入れた周遊観光コースの準備を進めており、今後の展開が楽しみだ。

東九州自動車道がもたらす波及効果と環境共生都市への道筋

また、『道の駅くしま』に期待される機能は、それだけにとどまらない。東九州地方では、全域の発展に不可欠なプロジェクトとして、北九州市小倉南区を起点に福岡県・大分県・宮崎県・鹿児島県を、周防灘・豊後水道・日

串間市

市 政 ル ポ

(宮崎県)



創立100周年を迎えた地元唯一の高校・県立福島高校でのSDGsの授業

向灘・志布志湾沿いに縦断する東九州自動車道の建設が、平成時代に入る直前から断続的に進められてきた。全線開通がいつになるかは予断を許さないものの、全通すれば《道の駅くしま》の拠点性は、より格段に高まるはずだ。

折しも令和2年7月29日、国土交通省は東九州自動車道建設に付随して計画された「日南市～串間市～志布志市」間のバイパス整備区間に設置する「日南東郷IC」(日南市)および「奈留IC(仮称)」(串間市)について、上下線どちらからでも出入りできるフルIC化への計画変更を発表している。



地球環境を身近な教材で学ぶSDGsの学習は小学生たちにも大人気

「これは串間市にとって、非常に大きな朗報といえます。例えば奈留ICの場合、当初は志布志市方面との出入りしかできない計画でした。もともとフルICとして計画されていた串間ICの存在と合わせ、交通便利性の向上だけにとどまらず、串間市の防災対策、経済発展対策、医療対策などの機能も、大きく向上していくことが見込まれます」(島田市長)

実際、冒頭に述べたような、台風など自然災害の被災により、従来の国道や鉄道が不通になったとしても、東九州自動車道が全通していれば、他地区への移動・避難の経路も格段に広がることだろう。

ところで、島田市政・2期目の令和6(2024)年11月、串間市は市制施行70周年の節目を迎える。その節目を迎えるまでに、SDGsのまちづくりに関してぜひ実施していきたい事業の一つとして、島田市長は「子どもたちへの環境教育の拡充」を挙げた。脱炭素社会の構築、SDGsのまちづくりを推進するには、より多くの市民による共通認識の醸成が不可欠だが、「その核となるのは子どもたちだから」(島田市長)

環境共生都市を育む当事者を育て、地域への愛着を育むという意味合いと共に、子どもたちへの環境教育の拡充は、大人たちの共通認識醸成への波及効果を確実にもたらす力がある。

昭和29(1954)年11月の市制施行時に4万1726人だった串間市の人口は、令和3年11月1日現在、1万6461人と大きく減少している。串間市の最大の地域資源でもある「森と海の循環」による、脱炭素社会の構築およびSDGsのまちづくりの推進は、自然環境を地球温暖化などによる破壊から護る(まも)試みであると同時に、「人口減少に対する最大の抑止力ともなるはず」(島田市長)

日本全体が不可避の人口減少時代を迎えている今、九州南東端の串間市で、地球環境の改善を念頭に、地域特性をフルに生かしつつ実践されている持続可能な地域づくりへの取り組みは、多様な意味で、要注目だ。

(取材：文〓遠藤隆／取材日〓令和3年10月28日)